北海道国際理解教育

十年の歩み

北海道国際理解教育研究協議会

であるという観点で述べたい。

まず、日本の教育を考えてみると、日本人に日本人が教えるという型が定着しており、正しい国際理解を進めることなく、依然として教育鎖国の後遺症をひきずっているといえる。

海外旅行一日一万人の時代といわれ、年間で３５０万人が　海外に出掛けて行く。広く世界に目を向けることはよいのだが、これらの海外旅行者の多くは団体旅行であり、素通り観光に終わっている。これでは各国の文化の違いを認識しあい、宗教・文化・国民性・歴史などを現状の中で考えるという国際理解は行われない。また、海外各国を貿易相手国、資源国としか見て来なかった戦前・戦中の教育が、現在なお尾を引いてはいないだろうか。

自然の美しさはスイス、文化はヨーロッパと、誤った認識がまだ残っており、この意味で教育の責任も多い。またこれらに便乗した業者のツアーも滞在目的、研修目的をしぼったものにしていく時期に来ていると考える。

具体的な国際理解のための教育内容・制度の改善についてだが、まず海外子女教育の充実はもちろん、同時に帰国子女の受け入れ体制を整備する必要がある。毎年約六千名の子女が帰国しているが、貴重な国際体験をしてきたこれらの子どもたちの経験を学校や地域で伸ばしてやることが、どれだけ将来の力となるであろう。ところが帰国すると受験体制にまきこまれ、経験から得たものを発揮できないのが、今日の教育の現状である。

伸び伸びと学級や学校、地域の中で、海外体験を反映できるような教育を定着させるべきであり、とりあえず帰国子女受け入れ学級を増やし、帰国子女教育研究協力校をつくるといった積極的な行政の努力が必要である。

つぎに“開かれた学校”ということについてだが、明治時代には多くの外国人から多くの知識を我々は学んだ。しかし、現在は、外国人が国立大学の教授、助教授にはなれない。国・公私立の大学に約九百名の外国教師がおり、国公立大学では１年契約の講師として働いている。こうした外人教師の力を生かす方向で取り組むべきであり、閉ざされた大学の意識払拭も国際理解につながる。それと同時に、海外留学生の受け入れ体制充実も必要であろう。こうした外人教師（留学生）の配置は、中・高校にも必要で“話す”“聞く”という面が劣る語学教育の改善にも大いに役立つと考える。

また、年間五千人にものぼる文部省の教員派遣事業についてだが、先に述べた団体の観光旅行のように、かけ足の旅行に終わっており、帰国後のレポートも極めてお粗末であると聞いている。海外教育の実情をもっと身につけ得る研修体制に改めるべきである。

最後に、この研究大会に参加した先生たちが、日常の教育活動総ての中で積極的に世界に目を開く教育を展開する“核”にならなくてはならない。海外派遣教員が単に“少数派”としてみられるようであってはならない。学校現場で海外での体験を十分発揮し、生かすことができるよう努力してもらいたい。

反省せよ！現地人蔑視観

海外子女教育振興財団理事・事務局長　　水野　富士夫氏

皆さんの国際理解推進の努力は実っただろうか、実りつつあるだろうか、きついことを言うようだがテーマにある“国際性豊かな日本人を求めて”ということにうすら寒い気がする。これだけ国際化が迫られている中で、海外にいる子どもたちは非国際化の道をたどっているのではないでしょうか。

ナイロビに赴任した先生の手紙に、「子どもたちにケニア人の友達の話を聞きたい」と言ったら「あんなクロンボの友達はいらない」と答えたとあった。こういったことは開発途上国でよくみられたことだが、最近の日本は先進国、開発途上国を問わず経済の上で占領しおり、現地人を見下げた態度や蔑視観をもっているようである。今や先進国アメリカや西ドイツにいる子どもすらその国に敬意をはらうというよりは、蔑視観をもって帰国してくる。日本の近代化の先達であったオランダだが、そこに親子で赴任し3年たっても5年たっても、オランダ人の友達がひとりもいないという実態もある。オランダの子どもと遊ぶこともなく、国際化のためいくら現地化をはかれといってもだめであろう。

イギリスでは階級的社会構造があり、小市民の子は公立学校に入学する。ロンドンに駐在する日本人の子弟はなかなかこの公立学校に入学せず、経済的に余裕のある家庭の子弟が入学する私立学校に入る。その結果は、英語力がつき、友達もできるのだが、一緒に階級的優越感も勉強してしまうのである。

これではマイナスの国際性といわなければならない。プラスの国際性ばかりを身につけては帰国しないということを強く訴えたい。

また、教育の問題として現行の公立学校現職中心の派遣の仕組みにも、早急な変革が望まれる。国際教員制度の実現を切に望みたい。

札幌市教育委員会文化課長　　原子　修氏

第二次世界大戦が終わるまえの1941年にルーズベルトとチャーチルが会談し、戦後の世界をどうするか話し合った。チャーチルは、大国による新世界秩序をあげ、ルーズベルトは地域的紛争の解決をあげた。その後、チャーチルはスターリンと会談し、スターリンはナショナリズム（国家主義）をあげた。大戦後、国際連合が設立され、この時アメリカのハル国務長官は、国際社会における秩序と平和を求めるユニバーサリズムを唱えた。

現在、我々はどんな教育の立場に立っているのだろうか。インターナショナリズムの立場もあやふやで、ナショナリズムに傾斜しているのではないだろうか。私は、ハル長官が唱えたユニバーサリズムがこれからの日本の教育の核になると考える。我々の現実は、急速に世界一体化の方向にすすんでいるのである。“食糧不足”“環境破壊”“経済不安”“核戦争のおそれ”“教育停滞”などが複合課題として、世界的に同時進行しているのである。

ハーバード大学のライシャワー氏は、「新しい時代に対応した新しい教育をできるだけ早くしなければ危機に陥る」と述べ、「インターナショナリズムはたやすくナショナリズムに傾斜するのでもうだめ。ユニバーサリズムへ至る過程と考えなければならない」と述べている。これらは我々に与えられた課題でもある。そこで“国際化”から“世界化”へ脱却する意識が必要になってくる。

現在は、“破滅”か“恒久繁栄”かの選択を迫られるのであり、課題解決のためには、短期・中期・長期の三段階にわたつて計画的、継続的、体系的、組織的、構造的な対処が必要なのである。例をあげると、短期とは、「世界理解に対する理解の促進」、中期とは「具体的相互協力」、長期とは「新しい相互依存体制を創出する」ことである。

教育の分野で考えるならば、世界的な相互依存体制の確立に寄与するような“新市民”を育成することが急務である。とりわけ、資源、食糧弱国日本が生きのびる道は、“新市民”育成のための新しい生涯教育体系を各地域に確立することである。

結論として、地域の生涯教育体系の確立の中で、①風前の灯である日本の現実理解（省資源・省エネなど）　②発展途上地域への理解と協力（ユニセフ献金など）　③新世界秩序創出のための国際理解と協力・・・の三点を必須のものとしてあげたい。

本会の組織的確立は、第六回全国海外子女教育研究大会札幌大会の開催をもって確立され、以後の全道研究大会の原点になったと言える。

第二部

海外子女教育教師の会の活動期

第二部　　海外子女教育教師の会の活動期

第６回全国海外子女教育研究大会を成功させた昭和54年度には、北海道から24名の派遣教師を送り出している。前年の53年度は12名、それ以前は３～６名の派遣数であったことを考えると、たいへんな増え方といえる。この後、北海道よりの派遣者数は毎年、15～20名になっている。“在外教育施設派遣教師激励会”を３月に開催することになったのも、この54年３月の激励会からである。

全道研究大会が各地のもちまわりで開催される

第６回全国大会を成功させたのち、北海道での国際理解教育の波紋を広げるように全道各地にて全道大会をひらき、会員の研究交流と帰国教師の健在を確認し、親睦を深めることに力を注いだ。

第１回北海道国際理解教育研究大会　十勝大会

大会主題“国際理解教育の望ましい発想をもとめて”～日常生活における国際理解～
期日　昭和55年８月24日
会場　十勝管内幕別町　教職員研修センター
日程　シンポジウム、分科会、講演会（講師・北海道新聞社論説委員、五十嵐健二氏）

シンポジウムでは韓国のキムさんから、日常生活を営む我々の様子から理解される日本人像を述べられ、メリー・ミラーさんはアメリカの子育てを述べる中から国際理解への切り込み口を示唆していただいた。講演会は国際化時代の教育をとりまく現状と課題をテーマに日本の現状を教育社会を中心に説かれ、閉鎖的、画一的な現状を述べられた。また、マスコミ情報の国際理解に及ぼす影響の大きさも指摘されている。教師と生徒の間も命令伝達の縦型社会を脱却し身近なところから進めて行くべであることを自省させられた。また、日本を多様によく知ることが国際人としての多様性につながることも述べられて、日常の教育活動の在り方におおきな示唆をあたえてくれる講演であった。

第２回北海道国際理解教育研究大会　桧山大会

大会主題“国際理解教育の望ましい発想を求めて”～開発教育を考える～
期日　昭和56年10月８日　９日
会場　桧山管内江差町文化センター
分科会、（学校教育部会・家庭社会教育部会）
講演会（講師・札幌市教委文化課長　原子　修氏“開発教育を考える”）

全道に二十数名の帰国教師が点在していた当時の研究交流は当然、“国際理解”とは、“国際性豊か”とはという基底にかかわることが中心になっていた。

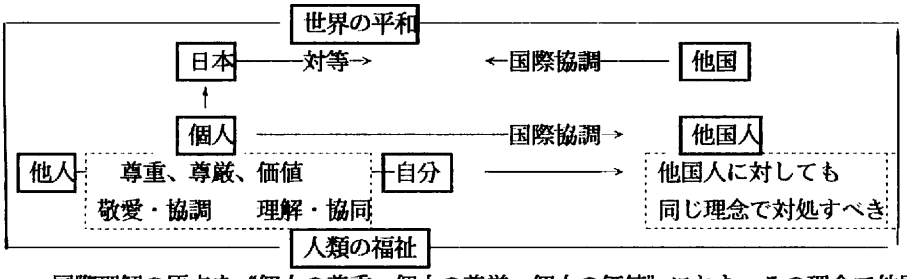
家庭・社会教育分科会レポートから

生きていくことのすばらしさと尊さを教えよう

―他者を、ちがいを丸ごと理解する教育を―　当別町立当別小学校教諭　中村　保

1．法規に見られる国際理解教育理念の図式化

日本国憲法の前文と第１条「基本的人権の尊重」、教育基本法の前文と第１条「教育の目的」、第２条「教育の方針」、学校教育法の第18条「目標」に見られる理念を統合し図式化すると次の如く表すことができる。



国際理解の原点を“個人の尊重、個人の尊厳、個人の価値”におき　その理念で他国および　他国民を理解し、同様に対応できるように育成する教育が国際理解教育の基底と考える。

2．国際性豊かな教育の基底

人が生きていくことにともなう共通的事実（衣食住）に目を向けながら、他者をちがいを丸ごと理解できる見方、考え方を育成する教育を。

知識、理解とともに態度や素養として身につけるべき理念

ひとりひとりの子どもの尊重→個性の尊重→個人の尊厳の確立→各国、各国民の多様性の尊重→人間の尊厳→人間愛・人類愛

偏見・独善・差別の排除 ― 国際性豊かな教育 ― 寛容・協調

自己実現のための自己教育

人種．国情の差異が人類の貴重な遺産の一部を形成しているという認識は、教育においては個性の尊重、ひとりひとりの人間性の尊重が人間理解の基本であるのと全く構図を同じくする。

ひとりひとりの人間性の違うことの認識の中に、豊かな人間性、礼、感謝、思いやり寛容、平和心等を強く希求し、偏見・独善・差別を断固排除する教育こそが国際的人間育成の基盤である。

3．日本人のパーソナリティ

タテ社会における無意識的な“ウチ”と“ソト”（ヨソ）の使いわけが存在しており、それは“ウチ”（内輪）の者に対する“ソト”（ヨソ）者意識へと発展している。“外国人”“外人”という言葉は“ソト〃（ヨソ）者意識の象徴。

ソトでは、自分を知らない社会集団において“旅の恥はかき捨て”という行動を示すがこれを改めるには、集団存在を意識した道徳から　誰が見ていなくても存在する個における道徳の確立を図るべきである。

そのためには、所属集団の中で自分の個性をだいじにしながら、自律性を高め、主体的にひとりの人間として確かに生きぬいていける個人に対する教育をより以上に徹底すべき

である。

そのとき　自分が、みんなが、いろいろなちがいや個人差を持ちながら　精一杯生きて行くことの、生きていることの素晴らしさと尊さをしっかり感じ合えることが、他国や他国民理解の基底となる。人間が生きていくという事実に先進や後進はないのである。まして先進、後進に人間としての“幸福論”をぶつなどこっけいと言わざるを得ない。

第1回、第2回全道研究会では　国際理解や国際性ゆたかな人間等を強く希求する研究が深められていったが第3回大会あたりから、授業を強く意識した研究が前面に押し出されてくるようになってきた。時の会長　木皿　弘勝先生は第3回大会の案内を会報にて次のように呼び掛けていた。

札幌大会の成功を

木々の緑もいよいよ深まり盛夏の候となりました。各位には、ご健勝に、ご活躍、ご精励のこととお慶び申し上げます。

殊に、本年帰国された方々は、3年振りの故郷の美しい緑と空気に、多難に過ごされた思いでも新たに感無量のこととお察しし、先ずは、ご家族ともどもお元気に帰国されましたことを遅ればせながら心からお慶び申し上げます。

私たちは、だれでもが希んでも得られない貴重な体験をして参りました。

日本を離れ、外国に住む日本の子ども達の教育を通じ、日本の教育、北海道の教育を振り返って見ることができ、外国に居住することによって、外国の人々と接し、いささかでもそれぞれの違いを身をもって理解、認識することができ、我が国がおかれている現在と将来の地位や役割の一端をも認識しました。

私たちは、これらの貴重な経験を基に、これからの国際社会に役立ち、日本の将来を担う国際性豊かな日本人の育成に積極的に提言し、実践をすすめる責務があると思います。

先輩各位の、これに関わる積極的な努力と発想により、第三回を迎えた　国際理解教育研究大会・札幌大会は国際性のかん養を、日常実践の中で、どう取り組むか、を課題にして開催することとしました。私たちと志を同じくする“北海道海外教育事情研究会”の方々とも手を携えて、広く、その主張を提言していきたいものと思います。

折、盛夏の夏季休業中でありますが会員各位には、同僚諸氏にも呼びかけ多数のご参加を得て、参加各位の向後の教育実践に有意義な契機として成功に導くよう格段のご協力お願い致します。

なお、別にご案内のとおり、総会ならびに夕食会を計画いたしております。帰国された皆さんを歓迎し、久し振りに語り合おうではありませんか。

酷暑を迎えます。各位のご家族ともども一層のご健康ご多幸をお祈りいたします。

第3回全道国際理解教育研究大会　札幌大会

日時　昭和57年8月9～10日

所　　札幌市立八軒西小学校

大会主題　日常できる国際理解教育の実践～帰国子女教育の諸問題を含めて～

目的　今日ほど世界が狭くなり、人的交流を基盤に、信頼関係の確立と世界の平和を必要としている時代はありません。現在及び将来の日本に、国際性豊かな日本人の育成を目指すことを本大会の目的とします。

分科会　第１分科会　国際理解教育を学校の中でどう取り組むか
　　第２分科会　海外研修視察の体験を、日常の授業にどう生かしているか
　　第３分科会　在外教育施設の現状と課題（派遣教師を目指す人のために）

この札幌大会では第１日目の開会式の後に、八軒西小学校の石田省子先生が授業をビデオ録画により発表し、研究討議をおこっなった。おそらく、授業発表をめざしていたのが夏季休業中のため録画というアイディアになったものと思う。授業は、ゆとりの時間を生かしての国際理解教育の学習で大きな波紋の輪を広げた。また、講師を招いての講演会も今回は体験発表という形で実施され“うれしかったこと　困ったこと”と題して八軒西小の児童３名、“アメリカンスクールに学んで”と題して外国人児童２名、“海外から日本をみつめて”と題して日本人父母３名、“日本人はどうあるべきか”と題して外国人父母２名が発表された。八軒西小学校は文部省海外帰国子女教育研究協力校に指定され、本道では数少ない帰国子女が多数在籍しているこの学校ならではの特色を十分生かした体験発表であった。

第４回北海道国際理解教育研究大会　余市大会

日時　昭和58年８月11日(木)　12日(金)

会場　後志余市町中央公民館

大会主題　“世界につながる教育”～海外子女教育の窓から、日本の教育を～

大会目的　国際性豊かな日本人の教育は、今日の教育において重要な課題であります。このような時に、在外教育施設で、教育指導に当たってきた教師が、その貴重な体験を基に、今日の教育問題を考え、国際理解教育に関心を寄せる各方面の方々との意見の交流をすることを通じて、これからの日本の教育を展望し、国際理解教育の充実に寄与することを目的とします。

記念講演　“北方圏構想と教育”　　北方圏センター副会長兼専務理事　気境　公男氏

第一分科会　国際理解教育を学校の中に、どう取り入れるか

第二分科会　海外視察の体験を教育に、どう生かしているか

第三分科会　在外教育施設の現状と課題～海外派遣教師をめざす人々のために～

大会第一日目は　本会顧問の気境公男氏の講演から進められ　北方圏の状況と本道とのつながり、北方圏文化と教育のつながりについて述べられた。アトラクションはニューデリー日本人学校に派遣された安達先生の８ミリフィルムにより、派遣教師家族の生活の様子が紹介された。第一分科会では帰国教師の実践をもとに学校の中に国際理解教育をどのようにとりいれるか４人の先生からレポートが発表された。

そのレポートの中で南長沼中学校の大津外志男先生は（ジャカルタ日本人学校　55年派遣）国際理解教育の方途を求めてという項で次のように述べている。

国内の国際理解の方途を求めて

南長沼中学校　大津外志男

①現状

海外校ではきわめて現実的な課題であった国際理解も国内の学校ではまだまだなじみの薄いあるいは現実化に遠いものでないでしょうか。日本の現状から世界の中の日本としてとらえるこの重要性は各方面から教育界へむけて要請されているのもまぎれもない現実であります。帰国教師、海外研修等を経た教師によって積極的に実践されているものと思いますが、とかく教育課程の中に組み込まれた計画的、組織的な指導とはならず観光案内的となったり、あるいは“またか”といった意識を招いたり　ひけらかした結果の上滑りとなってはいないでしょうか。現場では一部を除き帰国教師あるいは関心をもつ教師だけのものとなり、市民権を与えられていません。他にも“多忙の中で余裕がない”“学校の創造的な活動の中に組み込まれる基礎がない。”“生徒指導が緊急”“帰国子女といった問題にまだ直面しない”といった現実もあるでしょう。しかし、実際にはきわめて日常的な実践の中に国際理解の視点をもつことが総てであると思います。

②帰国教師として感じる使命と課題

自分の経験や海外で得た考え方、見方を生かしたいという個人的な欲求と同時に生徒たちに少しでも視野の広がりと豊かな国際感覚を身につけた人間として21世紀にむかい、世界の平和を築きあげる資質をもって欲しいと願う。しかし、このような欲求や願いを抱くだけでなく、具現化する手だてを教育課程の中に機能させてゆかなければならない。北海道海外子女教育教師の会等が今後とも実践的に指針を与えてくれるものと思います。今後、さらに帰国子女の問題も現実化して来るであろうし、学制、進路に悩む海外生活をしている生徒を見つつ観光案内的紹介から脱し、地域に根差した中から広く世界を見つめ、日本、日本人を自分の中にしっかりと確立させるべく地道な実践を大切にしたいと思う。

③現在校

帰国後の赴任校は夕張郡長沼町立南長沼中学校。純農村地帯で稲作を中心に畑作、近代的設備を備えた牧場地帯であります。生徒数110名と規模も小さく、幼少時からの顔見知りで仲良しの反面、閉鎖的で固定した集団で現状改革より維持を最上とし思考の練り合いや話し合い活動、新しいものへの不安等農村特有の生活行動様式である（58年度　南中の教育から）

④指導のためのめあて（観点）

A私達の住む長沼町をよりよく知ろう。

日本人として日本のことや日本の文化、郷土をよく知っていることが大切。そしてそれも外から見るとどう見えてくるのだろうか。

B相手の国や文化をそのまま理解しよう。

他の国やその文化を私達日本人が日本の感覚で判断してはいけない。その国にはその国の歴史と文化と習慣に応じた生き方があり、方法があります。それらを敬意をもって学ぶという態度が大切なのです。

C物質の豊かさより人間性

ランプ生活でも川での洗濯でもそこに住んでいる人にとってはそんなにみじめなことではない。急激な近代化こそ不幸。

D国全体の収入を高める援助を

全世界の20%の人々が全資源の70%を消費している不公平は早いもの勝ちのルールの通用、電車の席とりと同じで、同じ料金で座る人、立つ人、外側にぶら下がる人がいるのです。みんなが平等に生きるためには、少しの人間しか座ることのできない座席をとりはらうこと。一度手に入れた席を手放すのは勇気のいることです。しかし、このように富の分配だけでは豊かになるには不十分。最低部分の収入を高めることなのです。

E平和な世界

日本は広島、長崎といった経験をもつ唯一の被爆国です。積極的に世界の平和、反核といった問題に取り組むことこそ国際社会で信頼を得る道だと思います。

F文化交流と21世紀

国と国との交流、経済活動による交流から人とひととの交流、文化の交流こそこれから大切。これをみんなの手で。

⑤学級での実践

A学級目標

年度頭初、何らかの形での国際理解教育を意図し“長沼を知り合える学級”という一項を加えた。一学期間“長沼を知る活動”として生徒の中に定着し、現在ひとつの学級のカラーとして生徒の意欲的な活動となってきている。

本校の教育目標　1進んで行動する生徒　2責任感の強い生徒　3協力する生徒

学級の目標　1正しい判断、自主的な行動をしあえる学級　2きびしさと優しさの作りあえる学級　3長沼を知りあえる学級。

B長沼を知る活動

a国連機関やその活動を調べる。日本にある各種国連機関やその活動が世界の中でどんな働きをしているか。

bユニセフ活動への参加。学級に来た一通の手紙の切手がお金にかえられる。学級委員が直接ユニセフへ手紙をだした。その返事は生徒の心を強くうったものとなった。ユニセフには心より感謝している。現在古切手集めは班活動として定着、全校へのよびかけ提案の準備中である。

cアフリカ、インドシナ難民を考える。あいついで行われたシンポジウムの資料によって世界の人々の生活を知る。

以上a～cの活動を通し、私たちの生活はどうであるかを考えることができた。物豊かにして心貧しいということになりはしないか、という自分への問い直しが行われた。

Cもっと世界を知ろう

六月のはじめ、上のa～cの活動の中でもっと世界を知ろうということが学級の大きな色として出てきている。花壇のデザインにも世界の平和がテーマになった。外国の友達へ手紙を出そうという活動から現在12ケ国の日本の友達（日本人学校）へ手紙を出している。返事を楽しみに待っているところです。

D学校祭合唱コンクールでインドネシアの歌を

朝、帰りの会を利用して歌ったインドネシアの簡単な歌を学級の自由曲として選定、アンクロンという楽器演奏とあわせて現在練習中である。

⑥全校的な国際理解教育へ

以上の学級での活動を生徒会活動、集会活動などを通して全校的なものへと広めてゆくこと、

さらに教師自身が強いイニシアチブをもっていくことが子供達の目をかえてゆくことになるのではないでしょうか。国際理解教育の基を作り上げる地道な実践がまずもって必要になる。学級の活動を全校に紹介し（ユニセフ活動の参加よびかけ等）、集会活動で発表した（東南アジアと日本の役割、インドネシアの市民生活等）一学期でありました。

⑦二学期へ

本年度は帰国間もなく、いわば単発的な投げ込み教材としての実践のようでもありますがこれをさらに続け2，3学期にかけて“北方領土”“反核、軍縮を含めた東西問題”“南北の問題”等について生徒の中から声が出て来るのを期待したい。それらが何らかの形をなしつながることを本年の実践成果にしたい。

第5回北海道国際理解教育研究大会　札幌大会

日　時　昭和59年8月9日（木）10日（金）

会　場　札幌市立月寒小学校

大会主題　“世界につながる教育”～海外子女教育の窓から日本の教育を～

大会目的　国際性豊かな日本人の教育は、今日の教育において重要な課題であります。このような時に、在外教育施設で教育指導に当たってきた教師が、その貴重な体験を基に今日の教育問題を考え、国際理解教育に関心を寄せる各地方の方々との意見交流をすることを通じて、これからの日本の教育を展望し、国際理解教育の充実に寄与することを目的とします。

分科会テーマ

第一分科会　国際理解教育を学校の中で、どう取り組むか。

第二分科会　海外研修視察の体験を日常の授業にどう生かすか。

第三分科会　在外教育施設（日本人学校）の現状と課題～海外派遣教師を目指す人のために～

授業発表（ＶＴＲ）札幌市立月寒小学校5年　指導者　一関庶路教諭

この大会では外国人との交流パーテイを第一日目に行った。細川道子先生の指導によるフォークダンスを体育館で楽しむことができた。また、会員に呼び掛けてホームスティ名簿を作成し大会当日に来られた外国人に紹介をして、交流の輪を広げる試みも行った。

第6回北海道国際理解教育研究大会　登別大会

日　時　昭和６０年8月8日（木）　9日（金）

会　場　登別温泉小学校　登別温泉グランドホテル

大会主題　“世界に生きる日本の教育”～日本人としての自覚と国際意識の高揚をめざして～

大会目的　テレビを見ても、デパートで衣、食、住の商品に触れても、現代は一国のみでの生活は考えられません。教育においても、深く諸外国の事情を理解する時に至っています。21世紀に活躍する子どもたちは、学校教育の中でも広く世界を知り、世界協同体の一員として活躍できるように成長させなければならないと考えます。

このような中にあって、世界の中の日本人としての自覚を持ち、総ての人々の幸せを考えられる子どもをどう育てていったらよいか。

本大会では、海外の教育事情を視察されたり、海外生活を体験された先生方、そし

て国際理解に関心のある方々が国際性豊かな日本人を育成するために、日本人教育の問題を解決するための研究を深めることを目的として、多くの方々と広い視野に立って語り考えて行きたいと思います。

記念講演“世界の常識と日本の常識”～最近の時代相雑感
講師　日鉄セメント株式会社社長　伊藤　武氏

分科会テーマ

第一分科会　海外研修視察の体験を日常の授業にどう生かしていくか。

第二分科会　在外教育施設の現状と課題

授業発表（ＶＴＲによる）土に生きる母（勤労）授業者　登別温泉小学校　和野　忠康教諭
エリザベスサンダーホームへの道（人類愛）登別温泉中学校　佐藤　孝頼教諭

研究発表　“国際理解教育の実践”　発表者　登別温泉中学校　坂元　錦一教頭

この登別大会後、登別温泉グランドホテルで開かれた総会において次年度の第７回北海道国際理解教育研究大会は札幌市において　第13回全国海外子女教育研究大会として挙行することが取り決められ、その構想が打ち出された。

大会主題の設定について

もともと教育は、さまざまな個性、能力、体験をもった子どもたち（異の集団）を対象に、より豊かな人間性を求めて営まれるものであります。しかし、今日この個性の尊重がとりたてて叫ばれているところに教育の問題があると思います。

私達は、国をこえ、言葉のかべをこえて海外で生活し　世界各地でくらす日本の子どもたちの教育に取り組んできました。言い換えれば“異”の中に生き“異”とのかかわりを体験しながら日本の教育を見つめてきたと言えます。私達はこの体験から日本の子どもたちの毎日の教育や　子どもたち同士の日常を目の前にするとき　子どもたち一人ひとりの“ちがい”を“個性”としてとらえ合い　尊重し合うことの大切さを痛感しています。

こうした視点に立てば国際理解教育は特に新しい教育、難しい教育ではなく、また海外での体験のある者だけができる教育ではなく、誰にでもできる今日的な教育であり、それは教育の原点にせまる教育であると考えることができます。本大会の主題はこのような考えのもとに設定いたしました。大会に参加される皆さんとともに語り合い、考え合って、国際理解教育の在り方をより深めていきたいと考えています。

第13回全国海外子女教育研究大会　北海道大会
（第７回北海道国際理解教育研究大会）札幌大会

日　時　　昭和61年８月４日（月）５日（火）

会　場　　ホテルアカシア

大会主題　世界に生きる日本の教育　～誰にでもできる国際理解教育～

日程４日　開会式　北海道知事特別挨拶　記念講演　アトラクション　分科会　レセプション
５日　分科会　シンポジウム　閉会式

分科会　第一分科会　誰にでもできる国際理解教育
第二分科会　これからの教師に求められるもの

第三分科会　帰国子女をめぐる教育の諸問題
第四分科会　国の内外における国際交流教育
第五分科会　国際化、これだけは育てたい私の教育観
第六分科会　裏方が語る国際理解の心得

講演　国際化を考える～フレッチャー北海道プログラムを通じて～
講師　フレッチャー北海道プログラムセンター専務理事　松江　昭夫

シンポジウムテーマ　国際的視野から見た日本の教育を語る。（５名のパネリスト）

大会の経過

会場のホテルアカシアには全国各地から約三百名の参加者が集い、北海道において二度めの全国大会が開催された。

木皿大会実行委員長の開会の言葉に次いで　高橋大会長から本大会の意義並びに今後の課題等についての挨拶があった。続いて来賓として佐々木文部省海外子女教育専門官、福川外務省領事一課主席事務官、手塚海外子女教育振興財団理事、中西東京学芸大学海外子女教育センター教授から祝辞がのべられた。地元を代表して植村北海道教育長、荒井札幌教育次長から、激励の言葉も述べられた。特別挨拶として　横路北海道知事から北海道の開拓と教育との歴史的なかかわり、そして現在行われている国際交流の現状が述べられた。

記念講演は松江昭夫フレッチャー北海道プログラムセンター専務理事による国際ビジネスマンの養成を目的としたフレッチャー大学院大学の概況と今後の課題についての講演が行われたその要旨は、大学の設立者であるフレッチャー氏についての紹介、同大学に学ぶ学生とその研究内容、大学の卒業生の主な進路と卒業後の各界での活躍ぶりが述べられた。北海道の国際交流についても述べられたが、その中で本道の国際交流の歴史は古く、明治時代から現在まで続いていることを指摘され、今後の課題としては北海道に国際的教育機関を設立し、国際交流の拠点としたいと締めくくられた。

アトラクションは札幌市立南月寒小学校の児童による吹奏楽演奏が行われ"好きです札幌"などの演奏に盛大な拍手が贈られた。

分科会では二十数名の発表者がそれぞれのテーマに基づいて提案を行った。次のような話題が主として取り上げられていた。

第一分科会　誰にでもできる国際理解教育
- ・学校や家庭において、異文化をどのように理解し、吸収し、生かしているか。
- ・いじめ、差別、嘲笑、のけもの扱い等、人権問題の対処と国際理解教育とのかかわりをどのように考えていくか。
- ・日本についての教育を海外でどのように行っていたか。

第二分科会　これからの教師に求められるもの
- ・教師に求められる国際性とは何か。またその育成のためにはどうしたらよいか
- ・国際理解教育を推進するために、帰国教師はどんな役割をはたしたらよいか。
- ・国際理解教育を行う上での困難点は何か。

第三分科会　帰国子女をめぐる諸問題

・帰国子女の悩み、親の悩み、受け入れた学校の問題とその対策。
・帰国子女を迎えての好ましい学級づくりをするためにどう取り組み、また学校としてどんな点に創意工夫をしていくことが望ましいか。

第四分科会　国の内外における国際交流
・国内、国外にある外国人学校との交流をどのように進めるか。
・個人として、家庭として、国際交流をどんな形で進めたらよいか。

第五分科会　国際化、これだけは育てたい私の教育観
・国際性豊かな人間を育成するために、教科、道徳、特別活動の領域において学校教育の中で身につけさせたいことがらは何か。またそのためにはどのように指導したらよいか。
・国際性豊かな人間を育てるために、家庭では親はどんな点に配慮し、どう子どもを育てていったらよいのか。

第六分科会　裏方が語る国際理解の心得
・外国で現地理解を深めるために、日ごろどのような点に注意し、対処したらよいか。
・国内、国外を問わず国際理解を深めるために、家庭ではどんな点に留意し、創意工夫したらよいか。

シンポジウムにはパネリストとして気境公男北海学園監事、松江昭夫フレッチャー北海道プログラム専務理事、藤野武北海道武蔵女子短期大学講師、若林ヤタロオ日本航空札幌支店長、山中静修短期大学講師の五氏が出席し、高橋全国海外子女研究協議会会長の司会により進められた。各パネリストからは次のような意見が出された。

・現状では経済が重視されているが、政治、文化、芸術の面にもっと力をいれ、日本は国際的な役割を果たすべきである。そのためにも個性のある、しかも相手を納得させることのできる日本人を育成していくことが必要である。
・日本人はとかく日本人的な発想で物事を考えがちであるが、感覚や価値観において日本人とは違いのある人々が世界には存在することを理解し、硬軟両方の反応ができる人間であってほしい。
・現代の日本は多くの社会問題を抱えているが、その原因を端的に言えば、思いやりの欠如から生じているからではないだろうか。このような状況では、国際的にも通用しない。心の教育こそ幼児から生涯を通じて大切にされなければならないものであり、それは家庭における教育、とりわけ親の姿勢が大切である。
・学校は　幼い子どもであってもひとりの人間として尊重し、個性を育てる教育を行ってほしい。そのためにも教師も親も社会性をもっと身につけてほしい。

フロアーからも熱心な質問や意見が次々と出され、活気あふれるシンポジウムとなった。
二日間の大会は予定通り進行し、閉会式での実行委員長、大会会長の挨拶をもって全日程を無事終了した。

大会宣言

国際化があらゆる分野で急速に進展する中、日本の教育は新しい時代にむけて大きな改革が進められようとしている。このようなさなか海外子女の教育にたずさわっていたもの、また海外子女教育に深い理解と関心をもつ会員が、ここ札幌の地に全国から馳せ参じ全国大会を開催することができた。

国際性豊かな人間の育成は、今や学校教育目標の重要な柱として定着しつつあるが、具体的な実践面では充分とはいえない。しかし、国際理解教育は全国各地で多種多様な研究が進められ成果を上げつつ現在に至っている。

本大会では更に前進させることを願い、"誰にでもできる国際理解教育"を大きな目標として、二日間に亘り討議を重ねてきた。

私共はこの大会で得た成果と教訓を踏まえて実践を積み重ね、多くの教師と共に国際理解教育を充実進展するために、原動力となることを本大会の名において宣言する。

１９８６年８月５日　　第１３回全国海外子女教育研究大会　札幌大会

第７回北海道国際理解教育研究大会　札幌大会では、各分科会において本道会員も提言者としてレポート発表を行っています。その概要を紹介します。

世界に目をむけていこう　八軒西小の国際理解教育

札幌市立八軒西小学校　広瀬　保志

1　はじめに

本校は、児童に帰国子女が多いことから、昭和54年度から帰国子女教育研究協力校の指定を受けすすめてきた。帰国子女の適応指導から特性を生かした一般生徒への世界に目をむけたいわゆる国際理解教育へと61年度は取り組んでいる。国際理解教育という新しい分野を全職員が一丸となって考え、実践していこうとしているところである。大上段に構えず、これならできそうというところからの実践である。

2　なぜ今、国際理解教育なのか

本校では次のようにおさえている。

世界には、いろいろな国があり、そこには、日本人とちがった人がいて、ちがった文化がある。どこの国の人も、平和にくらそうとしている。本当の平和は、自分の国さえよければでない。世界の人々が平和にくらすためには、世界のいろいろな人や文化を知ること。知るためには人や文化に接すること。よいところを認め、仲良くすること。

「そのために、自分達ができることは」

子どもの意識の認識を諸調査で確認 → 教科、道徳の授業。行事や特活、委員会活動 地域や外国人等校外へのはたらきかけ → 子どもの高まり

3　活動内容

・カリキュラム作成、実践
・言語指導カリキュラムを使った適応指導
・授業（教科、道徳、特活等）

・国際委員会の設置
・外国人との交流会
・資料室の拡充　　（昭和54年アブダビ日本人学校派遣）

国際理解教育の出発点

旭川市立光陽中学校　　小川　雅美

1　はじめに

コスタ・リカ・サン・ホセ日本人学校での、ある校内研修会において、「日本の教育界で、国際理解教育の必要性が叫ばれるようになったのは、日本が貿易立国として世界にはばたき始めた頃に一致する。つまり日本の国際理解教育は、日本が世界に生き残るためには、貿易立国として、国際社会の第一線で堂々と渡り合える優秀な国際人・営業マンの育成が急務とされるところから始まった」との提言があった。

2　国際理解教育と「人間尊重」

私達は、この提言についての話し合いから、日本における国際理解教育の始まりについて理解することはできた。しかし、これからの国際理解教育という点から考えると、疑問を感じないわけにはいかなかった。そしてついにある先生が「日本の国際理解教育は、歴史的にはそのような理由から始まったのかもしれない。しかし今私達がやらなければならない国際理解教育というのは、それだけではないはず。もっと奥深いものではないでしょうか。一部のエリート養成ではなく、もっと広く、立派な日本国民の育成という義務教育の原点からみて、人間尊重という面に大きく拘わることではないでしょうか。」と述べた。これは、このときの私達のもやもやを吹き払う発言であった。私もその後この発言をもとに、国際理解教育を考え直してみた。優秀な国際的商人の育成も必要ではあるが、日本が国際的に信頼を得ることこそ大切なことである。最近は日本を訪れる外国人も多くなっており、また海外に出かける日本人も激増している。そのような中で、外国人との接触は、一部エリートだけでなく、今や全国民とも言うべきところまで来ている。従って日本人ひとり一人が、外国人に好感を持たれるような必要があると思われる。

さて、そんなことを考えていた私に一つの出来事が起きた。私は、蝶採集のためサン・ホセ市を離れ、ある田舎町へ出かけた。蝶採集をしているところへ、たまたま高校生位の年令と思われる若者が自転車に二人乗りしてやってきた。二人は私を見つけ、にやにやしながら「チーノ、チーノ。（中国人、中国人。）」とこそこそ言い合い、なかば嘲笑するかのような表情を浮かべ通り過ぎていった。私はこのとき、私達が身近な問題としてやらなければならない国際理解教育の何たるかの一面を身をもって見た思いがした。

3　おわりに

結局、今私達が身近にやらなければならない国際理解教育とは、肌の色の違い、人種、民族そして国の違いを越えて、お互いに尊重し合える心を育てること、つまり「人間尊重」の教育そのものから始まることに帰着せざるを得ないのではなかろうか。そしてこのことは、ひいては国際理解教育の究極の目的と思われる世界平和にもつながっていく出発点であるのではなかろうか。　　（昭和54年　サンホセ日本人学校派遣）

国際交流を深める海外文通指導　－郵便友の会の実践を通して－

苫小牧市立和光中学校　武藤　強

1　はじめに

現代は国際化の時代と言われている。交通、通信の手段などの進歩により、いろいろな面で国際交流が深められると共に、世界の人々との相互理解を図っている。このように国際化の波が浸透するにつれ、国際理解・国際交流の重要性が高まっている。そこで、クラブ活動、部活動の中に「郵便友の会」を取り入れ、海外文通を中心にして、国際交流を深める指導をしている。

2　海外文通指導の実践

(1) 郵便友の会

郵便友の会は、国内はもとより海外の友だちと手紙を交換し合うことにより、友情を深め知識を広め、平和な社会をつくることを目的とした小・中・高校生を中心に結成されている青少年の団体である。特に、活動の一つである海外文通は外国の風俗・習慣・文化などを知ることにより、国際理解、国際交流を深めるのに大きなプラスになっている。

(2) クラブ・部活動に於ける海外文通の概要

・文通クラブ員(35名)は、全員郵便友の会に加入し、毎週火曜日の午後一時間、海外文通を中心に活動している。また、東南アジアやアフリカで活躍している海外青年協力隊員や、日本人学校の生徒との文通活動をしている。

・英語部の生徒(15名)も、全員郵便友の会に加入し、文通クラブ員同様、多くの国のペンフレンドと文通活動をし、国際交流を深めている。

(3) 指導上留意している点

・文通相手は、日本郵便友の会協会に申し込んだり、姉妹都市を担当している関係機関に紹介してもらったり、海外に住んでいる知人等にたのむなどして得ている。

・手紙文はできるだけ平易にし、少しくらいの誤りを気にせず大胆に書かせる。長続きさせるためにも、書く内容を計画的に進めさせることが大切である。

・楽しい文通活動になるためにも、切手、写真、シールなどを同封させる。また、文通相手校には生徒のかいた絵や習字の作品、カレンダー、アルバム、英文の市勢要覧などを送っている。

・学校祭や国際文通週間には文通クラブ、英語部共催で海外文通展を開き、海外からきた手紙や絵などの作品を展示し、国際交流に努めさせている。

3　おわりに

国際理解、国際交流を深める方法はいろいろ考えられるが、海外文通はいつでも気軽にできる方法の一つである。特に中・高校生にとっては、授業で習った英語を実際に使い「生の英語」に接する点において興味深い活動であり、英語学習に果たす役割は大きいものと確信している。

(昭和50年　ヨハネスブルグ日本人学校派遣)

国際理解クラブの取り組みについて

余市町立大川小学校　菅原　美和子

1　はじめに

昭和59年３月、中米のコスタ・リカ共和国から帰国し、３年間の体験を基になんとか国際理解教育ができないものかと常々考えていた。担任していた１年２組では、授業でも折々コスタリカの話をしたり、スペイン語の歌を教えたりしていたが、計画性のないものであった。そこで毎週１時間のクラブ活動の時間を利用して、もう少し計画的に国際理解教育に取り組むことを考えた。

２　取り組み

大川小では年度初めに、職員に開設クラブの希望調査をするが、今までもっていた家庭科クラブをやめ、新たに国際理解クラブの設立を提案し、了承された。毎週火曜日、６教時のクラブ活動の時間、19人の５・６年生が集まり、国際理解クラブがスタートした。このクラブの目的は子ども達が外国に目を向けることにより、一層広い視野に立って物事を考え、将来、外国の人と、同じ人間として物おじせず接していける素地を養うことであり、子ども達がこのクラブに入った動機は、外国のことをいろいろ知りたいというものが主であった。

活動の内容としては、私の方で10分程度、絵ハガキ等を見せながらコスタ・リカの話をし、子ども達には、トピックスと称して毎週全員に新聞やテレビで得た世界のニュースを発表させることにした。更には、コスタ・リカの同年令の子ども達との文通や、旅行で日本を訪れていた外国人を教室に招いて、直接外国の話をきく機会も持った。文通に関しては、10数名の子どもの文をスペイン語に訳したり、宛名の書き方を教えたりすることはたいへんであったが、返事が届いた時の子ども達の喜びようをみるにつけ、やはり、手間のかかることでも子ども達のためにやらねばならないことと思った。又、外国人との交流は、子ども達にとって大きな刺激となり、外国が急に身近に感じられる機会であった。前期と後期に分けて開設されるクラブ活動は、今回３回目を迎え、ニューヨークのオースチン社が発行している“地球の子ども”というニュースレターに作文を送る活動も加え益々、活発になっている。

３　おわりに

初めは一体何ができるだろうと不安の中で始めたクラブであるが、子ども達の心に外国をよりよく知ろうという意識が芽生えてきている。今後も、クラブ活動を通しての国際理解をすすめたい。　　（昭和56年　サン・ホセ日本人学校派遣）

国際理解を深める授業の方略

生徒と外国人のふれ合いの中から　北海道教育大学附属釧路中学校　田畑　雅晧

１　はじめに

21世紀の教育目標として“世界の中の日本人”がクローズアップされ、「国際的視野の中での日本文化の理解に基づく日本人の育成」が私たち教師の使命として求められている。特に海外の日本人学校からの帰国教師は、自らの体験を生かし、国際理解教育を推進しなければならない。その一つとして、昭和57年釧路管内海外教育事情研究会を再組織し、海外視察の体験を教育現場に還流するための研修会、帰国報告会、授業研究を実施している。国際的な広い資質をもった児童生徒の育成をはかるための国際理解の授業の方略の実践の一端を述べてみた。

２　国際理解教育の授業

子どもたちの異文化の理解をはかるためには、書物や映像など間接体験と外国へ行ったり、外国人と話す直接体験がある。本研究会では、特に外国人をゲストとして授業に招き、児童生

徒と直接ふれ合いながら、相互理解をこころみた。第１回は２年生の道徳“世界の子ども”ゲストはハリー・ハルボーセー氏、授業者は工藤教諭（城山小・元クェート日本人学校）第２回目は樋原教諭（武佐小・現パナマ日本人学校）による５年生社会科“世界の国々”ゲストはメアリー・バイラー氏で実践した。日頃外国人とふれ合う機会が少ない子ども達は外国人が直接話しかけることによって、外国の文化に対する興味を深くした。第３回は昭和60年12月本校を会場に英語の授業、１年“世界のクリスマス”権五曄（コン・オヨプ）氏をゲストに研究交流がもたれた。韓国は日本と最も近い国でありながら、生徒はそこで生活している人々についてほとんど知らない。生徒から、韓国の人々はクリスマスについてどの位知っているか、プレゼントは作ったり、買ったりするのか、食事はどんなものかなど素朴な質問が多く出た。権先生（前駐釧路韓国教育院長）はＯＨＰのシートに「世界の愛はひとつ」をタイトルにし、トナカイの絵を描き、韓国のクリスマス事情について話があり、授業をしめくくることができた。

３　おわりに

国際理解教育とは何かを考えることは日本の教育を考えることである。相手の国を理解することは相手の立場を理解することである。相互の立場を尊重することは人間愛に通じるものである。　　（昭和54年　韓国京城日本人学校派遣）

昭和52年に北海道海外子女教育教師の会が結成されてから十年、この間、全道研究大会６回全国大会２回を開催してきたが、それ以外の活動にも大きな業績を残している。

１．帰国教師の派遣先での体験を綴った《どさんこ先生異国に住んで》の刊行も行われ、北海道教育社より自費出版で１集、２集が完成した。

“どさんこ先生異国に住んで”　（昭和55年）

“続どさんこ先生異国に住んで”　（昭和58年）

２．全道の各地にて、管内規模の研究会が開かれるようになってきた。

昭和61年　上川管内海外派遣教師の会発足

昭和62年７月 網走管内国際理解教育研究会第１回総会　北見北光小学校にて開催。

昭和62年11月 渡島国際理解教育研究会　第４回目の研究集会を八雲小学校にて開催。

昭和62年11月　第２回日高海外教育事情研究大会　静内町民休養センターにて開催。

十勝や釧路、渡島、桧山の管内は北海道内でも早期に　海外教育事情研究会や国際理解教育研究会を設立し活動を続けてきた。特に桧山の国際理解教育の歩みは昭和56年の第２回全道国際理解教育研究大会を江差町文化センターにて開催して以来　精力的な活動を積み上げて来ているところである。

昭和57年11月24日　江差小学校にて　桧山国際理解教育研究会

昭和58年12月 2日　今金小学校にて　桧山国際理解教育研究会

昭和58年 2月12日　熊石町ひらたない荘にて国際理解教育冬期研修会

昭和59年 3月 3日　江差町文化センターにて国際理解教育冬期研修会

昭和61年度の研究会は２月26日　北桧山小学校にて開催されている。

第三部

北海道国際理解教育研究協議会になってから

第三部　北海道国際理解教育研究協議会になってから

組織改正への動き

２回目の全国大会を終えた頃、帰国教師の数は 150名を越えていました。発足時の12名を思うと隔世の感がします。また、日本の政治、経済、文化のあらゆる分野が国際化の流れの中にあり、教育界にも臨教審の答申をはじめ、国際理解教育の推進が強く求められる時代が到来しました。即ち、学校現場にある教育関係者のすべてが、国際理解教育について、教育課程における位置付け、教材の開発、指導法の研究等に目を向けなければならない時代になったわけです。このことは、大きな潮のうねりとなって本会の在り方についても、揺さぶりをかけることになりました。第13回全国大会後の61年度総会の役員改選で新会長に就任した千葉福男先生（昭和54年　ジャカルタ日本人学校派遣）はその就任挨拶の中で次のように述べています。

昭和61年度総会におきまして、はからずも会長の大役を命ぜられました。もとよりその器でもなく浅学非才ではありますが、総会決定の命によって、微力を尽くす決意を固めましたのでよろしくお願い申し上げます。

さて、本会設立十周年を迎え、今年の３月の帰国者を加えると帰国教師数 150名になるということを考えますと、昔から言われる10年一昔の大きな区切りの年を迎えたと言えます。しかし、残念なことに帰国者の半数の先生方は本会に未加入であり、このままでは年々会の存在が危ぶまれる様になるのではないかと、不安を感じるのであります。総会の席上でも「新役員の任務は、本会の立て直しと、新しい魅力のある会づくり」に大きな期待が寄せられていましたので、私ども役員は心を一つにして、全員加入の活力ある会づくりを念頭において、皆様の役に立ちたいと思っておりますので、ご協力下さいますようお願い申し上げる次第でございます。

1　会員増に対応する組織づくりをめざす。
2　全員加入をめざし、会費の見直し、事業の見直しを行う。
3　研修面を重視して、本道の課題を設定して解明、研究を行う。
4　個人所有の記録、諸資料を全道的教育に活用する方策を考え整備する。
5　会則の改正を行い、活力のある会の運営に努める。

等を基本方針として活動計画案をたて皆さんのご意見を頂いて運営に入りたいと思っております。

今、我が国は挙げて21世紀指向の胎動を奏でておりますが、産業構造の体質改善と共に、最も重要視されるのが、人づくり即ち教育改革の問題であります。国際社会に生きる人間育成は、語るに安く、すでに標榜されて久しいにもかかわらず、国際性を高めるための教育活動はいまだに道内各校のほとんどが具体的な教育活動に入っていない現状にあるといえます。国際交流の第一線での経験を今こそ役立てるべき時ではないかと思うのです。もちろん一人一人は与えられた地域と学校において、それなりの努力はしているのですが、個の力には限界があります。力を結集し、英知を出し合い、私共の持っている貴重な体験と教育資料を積極的に本道教育の推進に注ぎ込んで行きたいと思うのです。

遅ればせながら、１月12日に引き継ぎを終え、新しい役員の委嘱も完了しましたので、皆様のご支援を頂きながら、会務推進に当たりたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

また、全国大会後に事務局長に就任された磯貝登先生（昭和58年　ニューヨーク日本人学校

派遣）は1月12日の新旧合同役員会での話し合いの内容について、会報5号に次のように報告されています。

1　近々、21世紀を迎えるに当たって、国際性を身につけた子どもの育成を考えた場合、私達関係者はどのような方向性のもとに諸活動を推進しなければならないか。

2　本会は、会員 120名をこえる大世帯となってきていることを考え、会の目的を再確認する中で諸事業の推進と組織の強化を図る必要がある。

3　規約の検討と改正の必要がある。

この新旧役員引き継ぎ会では　会則の改正について次のようなことが話し合われました。

1　名称を国際理解教育研究協議会のように変更し、もっと一般化するようにしよう。

2　目的や事業も名称変更に合わせて検討しよう。

3　会員の規定の仕方を検討し、合わせて組織という条項を置こう。賛助会員の規定も検討しよう。

4　総会は、従来夏の全道大会の折りに合わせて実施してきたが、参加人数や会計年度、人事異動による名簿の変更、会員が全道に点在していること等を考え“理事会をもって総会にかえる。”というように改める方向で検討しよう。
総会の時期としては、会計年度を4月～3月にしたいことを考えると、3月上旬の“派遣教員の事前研修会（激励会）の日にしてはどうか。

これらの懸案をかかえた第8回北海道国際理解教育・旭川大会はまさに新たなる第一歩への試金石となっていったのです。千葉新会長は、会報6号にて旭川大会の意義について次のように述べています。

本会が発足してから今年で10年になり、海外派遣を終えて帰国した仲間も 150名を数えるようになりました。

10周年を一つの区切りとして、本会の組織や活動の在り方を今日的課題解明上と、会員増による運営上の観点から見直して、現情勢に対応していきたいと考え、事務局会議、役員会、理事会等を重ね、規約改正を中心とした原案を皆様に提示させて頂きました。8月の旭川大会での総会を機にご意見をいただきご決定いただきたく思いますので、よろしくお願い申し上げる次第でございます。

申すまでもなく、今、日本は大変厳しい世界情勢の中に立たされており、今後の我が国の生きる道を考え併せますと、国際社会の一員として生きる日本人の育成ということが、教育界に課せられた現時点及び21世紀に向けての大きな課題であると思います。本会はこれらの観点に立って、すでに発足以来今日まで、国際理解教育振興と教育現場における国際理解教育の在り方を求めて、活動と研修を深めてきておりますが、北海道教育の現状としては残念ながらほとんどの学校がその必然的必要性を認めながら、なお、学校での取り組みに入れず模索を続けている状況にあるといえます。

我々の役割の一つがこの点にあるのではないかと思います。既に上川地区をはじめ十勝、渡島、桧山、釧路、網走等で管内的組織を持ち、積極的かつ先駆的な役割活動を進めておりますが、これらの優れた諸活動や研修の成果を広く全道の各地でなお模索している学校や諸般の事

情で組織化した活動に入れずにいる仲間たちの実践資料として交流しあい、活用し合っていきたいと思うのであります。

今年の旭川大会には本会としての大きな期待と意義がこめられています。一つは、国際理解教育振興の起爆的役割を果たし、学校における身近な国際理解教育の在り方について事例提言をする。二つめは、本大会を機に10年の積み上げを土台とした新しい歩みの第一歩を旭川の地で踏み出すことと考えたのであります。一人でも多くの仲間がこれらの点を考えられて、是非御参集下さるよう重ねてお願い申し上げましてごあいさつといたします。

懸案の規約改正については　旭川大会で行われた総会の場で承認され北海道海外子女教育教師の会は北海道国際理解教育研究協議会へと変貌を遂げました。この間、会員名簿作成、未納会費の徴収に全力を注ぎ、会費の値下げも行われました。入会費はこれまで通りの七千円、年会費は五千円から三千円になりました。したがって昭和62年度からの新会員は初年度一万円の納入ということになります。

第８回北海道国際理解教育研究大会　旭川大会

日　時　　昭和62年８月28日(金) 29日(土)

会　場　　第１日目　旭川勤労者福祉会館　第２日目　旭川市立忠和小学校

大会主題　"たくましく世界に生きる子供の育成を目指して" －身近な国際理解教育－

大会目的　厳しい国際情勢のもとにあって、国際社会に適応する豊かな日本人の育成の必要が今ほどさけばれている時はありません。私達は、言語、風俗、習慣等を異にする異文化のなかに生活し、世界各地に暮らす様々な個性、能力、体験を持つ日本人の子供の教育に取り組んでまいりました。そうして、その経験から、民族や国家を越えた一人ひとりの人格を認め合い尊重し合うことこそ世界に通じる人間の育成のための教育の原点であることを学んでまいりました。本大会主題は、このような教育の原点に立ち、毎日の教育活動のなかで「今、我々は何をすべきか」を考えようと設定したものであります。授業研究はその実験的な試みの一つであり、このような試みを通して国際理解教育のありかたを求めることを本大会の目的とします。

分科会テーマ

第１分科会　これからの教師に求められるもの　・国際理解教育のあり方
　　・国際化への実践研究

第２分科会　僕たち、私達から見た外国と日本　・文化、風俗、習慣、考え方の違い
　　・外国から見た日本

第３分科会　在外教育施設の現状と課題　・日本人学校の現状報告
　　・日本人学校を通してみた教育の課題

記念講演　気になる日本の子の"無口"
　　講師　駐札大韓民国総領事館領事　チェー・サンラク氏

授業研究　小学校の部　旭川市立忠和小学校２年　指導者　田山　裕教諭
　　中学校の部　旭川市立永山中学校３年　指導者　南　信義教諭

本大会の特筆は、田山、南教諭の授業発表である。田山先生は道徳で人類愛を基調とした"

パン”、南先生は特別活動でイーストハンプトン校生との交流から身近な国際交流へ意識を高める授業を公開したことです。大会要項の中に公開授業の指導案が載せられ、授業後に研究議をもった意義はとても高い評価を受けました。本大会に参加した　旭川市立北門中学校の久松先生は大会の感想を次のように寄せています。

教師になって10年、いろいろな研究会に参加してきましたが、この度の国際理解教育研究会は、強烈な印象が残りました。私も１度は実践してみたいと思うような授業、先生も生徒も準備にたいへんだったでしょうが、きっと楽しく有意義なうちに、当日をむかえたことが想像されます。授業後の意見交換も参加者の意欲と熱気につつまれ、これこそ本当の研究会だと思えるほどのものでした。

国際理解の研究会というと、海外日本人学校のことと思いちがいをしている先生が、かなりたくさんいるのは残念なことです。

教育の源、しいては社会発展の源に通ずる人間理解、隣人愛を、国際理解の形で進めるこの研究会で、今の教育課程では、道徳か特活で位置付けるしか方法がなく、今後の課題として大きくクローズアップされたことも、もっと教育関係者に広めなければなりません。きっとこの研究会に参加された方は、みな、教育の新しい一つの目標を確認し、その研究の和が広がることを願って帰途についたと思います。本当にすばらしい研究会でした。

新しい決意のもとに開かれた旭川大会は、その使命を十分に果たし、授業研究を中心とした大会として次々と受け継がれて行くことになりました。

第９回北海道国際理解教育研究大会渡島大会

大会主題　“たくましく世界に生きる子どもの育成をめざして”

日　時　昭和63年11月４日（金）　５日（土）

会　場　八雲町立八雲小学校　森町立森中学校　北海道八雲養護学校　南北海道大沼婦人会館

授業発表　小学校　八雲町立八雲小学校　長田　修一教諭　社会科４年

中学校　森町立森中学校　飯田　幸三教諭　国語科２年

高校　北海道八雲養護学校　原　恒雄教諭　生徒会活動

分科会　第１日目　小学校部会　世界との交流

中学校部会　世界平和

高等学校部会　国際協力

第２日目　研究協議　“これからの教師に求められるもの”

・国際理解教育のあり方　・国際化への実践研究

“僕たち、私たちから見た外国と日本”

・文化、風俗、習慣、考え方の違い　・外国から見た日

講　演　“世界の中の日本人”講師　函館遺愛女子高等学校長　赤城　泰氏

本大会も渡島支部の諸先生の情熱が参加者の胸につたわる　教育現場を大切に考えた大会でした。授業者の熱い思いとともに実行委員長の村岸勝郎校長先生を中心にしっかりとした足場を築いている実践は旭川大会で目指したものを　しっかりと我々に提示してくれました。この

大会の研究収録の終わりに事務局を担当した大沼中学校の田口　公紀先生は次のように感謝の文を載せております。

今、振り返って想い起こせば、「よくやったなぁ。」「よくも大会が開催できたものだ。」という感がする。昨年（62年)12月から降って涌いたような「渡島で全道大会を～」との話であったが、実際にはなかなか準備が進まず、本格的にとりかかったのは、新年度を迎えてからである。４月に大会運営実行委員会を設置し、月１回から２回、総計９回の会議を持ったが、渡島国際理解教育研究会は総勢30名の小世帯の上、会員は管内各地に散らばっており、集まるのも容易でない。大沼中学校が会議場となるのであるが、松前方面や、長万部方面からは100㎞以上の道程があり、２時間以上もかかって集まることになるのである。勢い会議日は決まって土曜日の午後３時過ぎからとなる。そして、夜７時・８時まで話し合うこともあり、それからまた帰路につくわけである。また、総務部、庶務・広報部、研究部それぞれの部会においても然りこの苦労といったら、当人でなければ判らないことであろう。

このように、今大会成功のかげには、渡島国際理解教育研究会員一人ひとりの大会にかける情熱・執念・協力があったからこそと事務局担当として厚く感謝申し上げます。

あとがきにかえて

十年の歩みということで記録をたどってきましたが、旭川、渡島の仲間の道程は、第１０回札幌大会、第１１回網走大会へ引き継がれてきました。これらの成果については、またあらためて述べられることになると思います。帰国教師という殻の中の活動を打ち破り国際理解教育の展開の中核となって活動する仲間の輪をさらに強固に広める努力は、今後もたゆまなく続けられなければなりません。現在、北海道から在外教育施設へ派遣されている53名の仲間を加えると 278名の派遣教師がいますが、多くの先輩諸氏の志を受け継ぎ、文字どおりに北海道国際理解教育研究の中核となるべく、これまでの歩みを記してまいりました。さらなる本会の発展を願い関係諸氏のご協力、ご指導をお願いする次第であります。